



仙台市文化財パンフレット第21集

名取川と遺跡

—— 川ぞいにくりひろげられた人々の歴史 ——



◀ 山あいの風景
(鶴ヶ森より名取川上流をのぞむ)



▲ 里の風景
(空からみた山田上ノ台遺跡)



◀ 平地の風景
(空からみた名取川下流)



■ 発行：〒980-91 仙台市青葉区国分町三丁目7-1 ☎ 261-1111
仙台市教育委員会文化財課

■ 発行日：平成2年11月 ■ 印刷：株式会社新精版印刷

仙台市教育委員会

はじめに

今回の文化財展は、人間の生活と自然環境とのかがわりの中でも特に「名取川」に焦点をあて、川ぞいに残された遺跡を通して、そこでくりひろげられてきたらしの歴史をさぐるうとするものです。

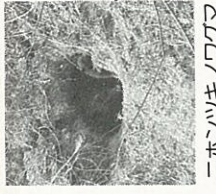
名取川と自然

名取川

名取川は仙台市秋保にある神室岳（標高1,353m）から源を発し、仙台市生出で暮岩



フナ林



二ホンツキノワグマ



二ホンカモシカ



二ホンザル

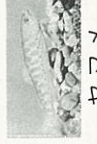
大東岳

神室岳

秋保大滝



神室岳(標高1,350m)



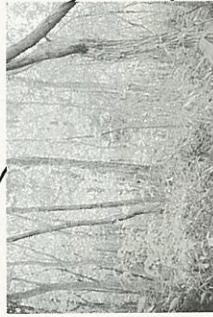
ヤマメ



イワナ



スギ林



コナラ林



ヒメギフチョウ

釜房ダム

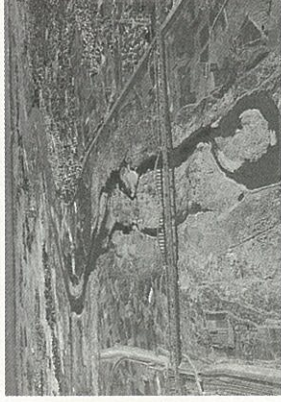


釜房ダム

秋保温泉

暮石川

坪沼川



名取大橋から下流

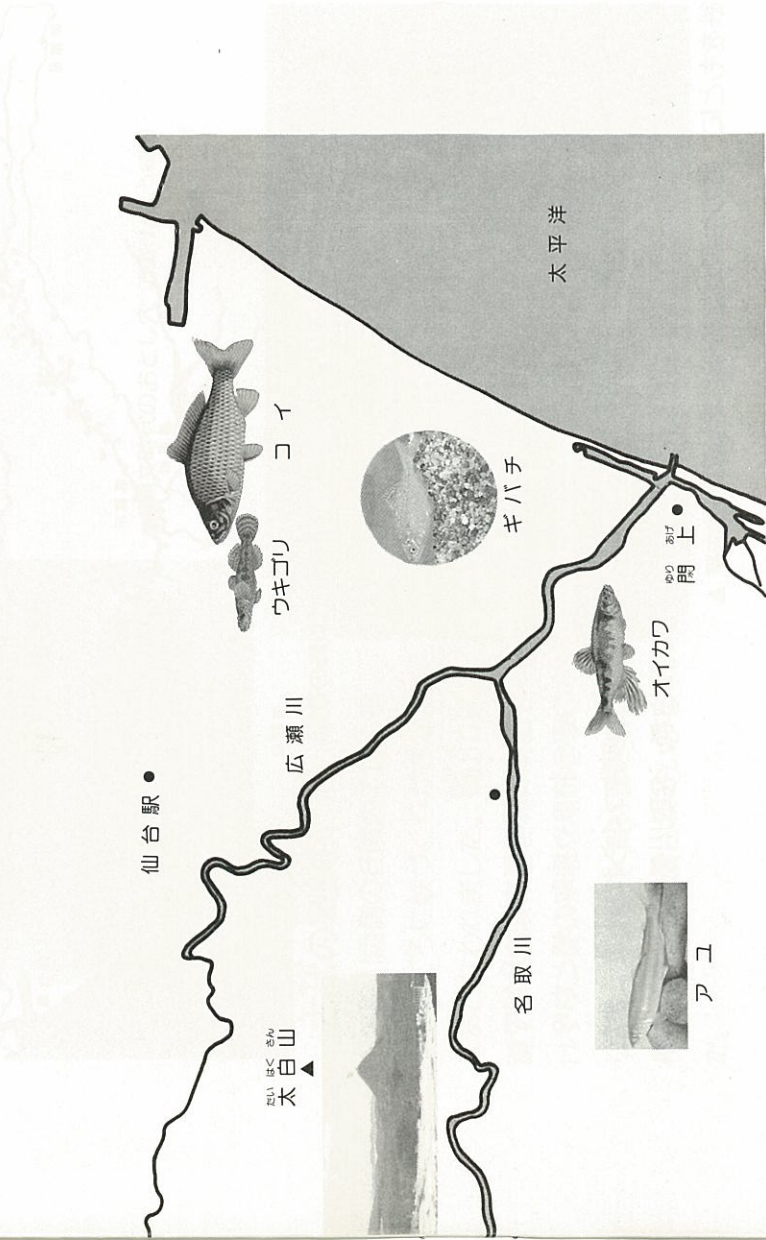


河口付近

川、中田で広瀬川などの支流を合わせ、名取市閑上で太平洋に注ぐ長さ55kmの川です。雨が川に集まる流域面積は939km²で、宮城県全体の1%におよびます。

名取川の自然

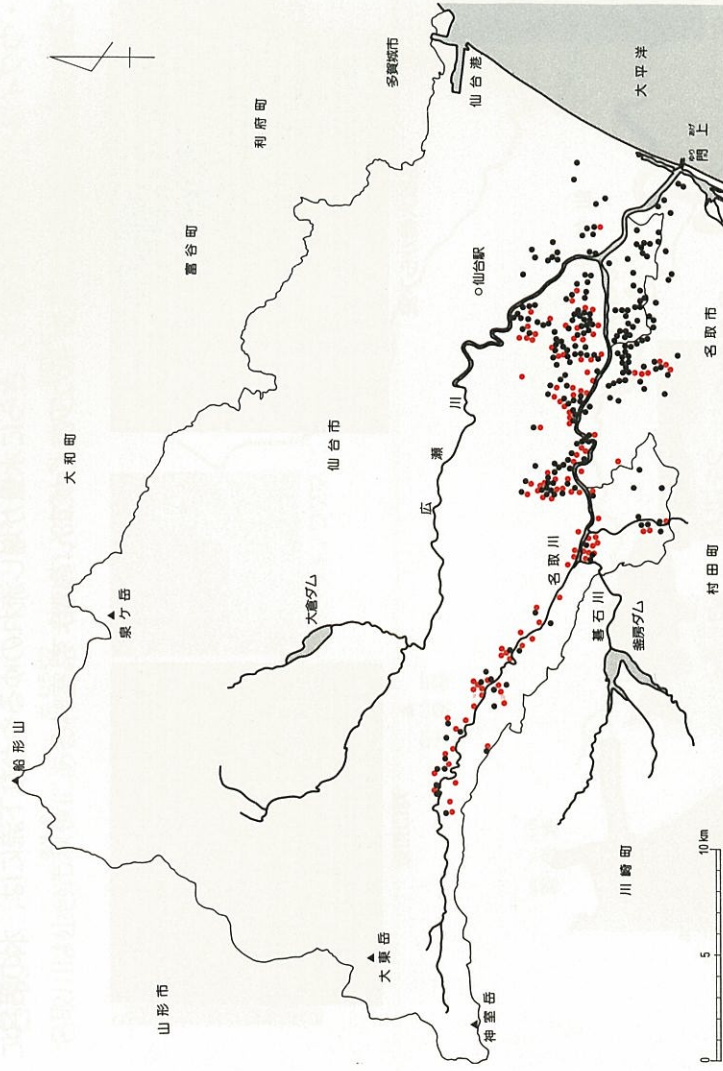
名取川の周辺には、上流の神室岳・大東岳を中心にフナ林が広がり、上流から中流にかけてはコナラ・クリ林が豊富で、その中にスギ林がちらばっています。名取川は変化に富む地形のため、160種以上の野鳥が観察され、上流の山深いところには、二ホンザル・二ホンツキノワグマ・二ホンカモシカなどがみられます。また、名取川にすむ魚は、冷たく水のきれいな上流にはイワナ・ヤマメなどが、水量が増し水温の高くなる中流にはアユ・ウグイなどがすんでいます。さらに水量が増し流れのゆるやかな下流には、水の汚れにも強いコイ・ゼニタナコ・オイカワなどがすんでいます。



遺跡の分布

名取川ぞいには、仙台市内にある遺跡の1/3にあたるおよそ230ヶ所もの遺跡が分布しています。それらの分布をみると、縄文時代以前と弥生時代からあとは大きな違いをみることができません。

縄文時代以前の遺跡は、主に山あいから里にかけて多く分布しています。弥生時代からあともなると分布はさらに平地まで広がり、特に里から平地にかけて遺跡の集中する傾向がみられます。



▲ 遺跡の分布（赤は縄文時代以前の遺跡、黒は弥生時代以降の遺跡）

山あいの遺跡

山あいは下流の里や平地にくらべてけわしい地形ですが、最も自然に恵まれた地域でした。このため、縄文時代には彼らの食料であった動物や木の実の狩りや採取の場となり、丘陵の上や谷すじでは、けものをとるための「おとし穴」が多数つくられました。また、平安時代ごろになると山の木々は良質の燃料材として利用され、名取川ぞいからとれる砂鉄をもとに、鉄の生産が始められました。

山あいの小さなムラ

縄文時代には、山あいの丘陵上に相ノ原遺跡・梨野A遺跡・茂庭けんとう城跡のような、小さなムラがちらばっていました。名取川北側の梨野A遺跡では、住居のほかに墓なども発見されています。



▲ 縄文時代の住居あと（梨野A遺跡）

狩人たちのおとし穴

けもの通る道すじからは、縄文時代の「おとし穴」が発見されています。これらは長さ1～3mの長方形・楕円形の穴で、深さが2mに達するものもあり、多くは10数個がならべてつくられています。



▲ 縄文時代のおとし穴（茂庭けんとう城跡）

古代の製鉄所

名取川両側の丘陵内では、平安時代ごろに鉄づくりがさかんにおこなわれました。嶺山C遺跡では、丘陵の谷ざわの斜面をけずり、長い平らな場所をつくりだし、製鉄炉・資材置き場・作業場などが配置されていました。



▲ 平安時代の製鉄炉（嶺山C遺跡）

里の遺跡

里の遺跡とは、平地の近くの台地や丘陵のふもとにある遺跡のことです。平地へ向かって開けた日あたりのよい台地では、食料を確保する場所である山がすぐ後ろにあることから、縄文時代には大きなムラがつくられました。また、平地を見おろせる場所でもあるため、古墳時代からは、墓地や信仰の場としても利用されていました。さらに燃料や材料を確保するのに便利な場所なので、やきものを焼く窯もつくられました。



▲ 縄文時代の住居あと（山田上ノ台遺跡）

里の大きなムラ

名取川北側の台地には、縄文時代に山田上ノ台遺跡や北前遺跡のような大きなムラがつくられました。特に山田上ノ台遺跡では、およそ4000年前の住居あとがたくさん発見されており、住居の中からは当時使われた多くの土器が見つかりました。

古代のやきものづくり

名取川北側の丘陵の斜面では、古代にやきものづくりが盛んにおこなわれていました。土手内遺跡では、古墳時代終わりごろの須恵器を焼いた窯がならんで発見されました。



▲ 古墳時代の窯あと（土手内遺跡）

いのりの山

平地を見おろせる台地や丘陵の斜面は、古代から人々の信仰の場となってきました。名取市の大前山付近は平安時代終わりごろから室町時代にかけて信仰の中心としてさかえ、今でも人々の間にうけつがれています。

▲ お経を入れた竈（名取市大前山遺跡）
— 名取市教育委員会提供 —

▲ 板碑（名取市大前山遺跡）
— 名取市教育委員会提供 —

黄泉の岩あな

名取川両岸の丘陵の斜面には、古墳時代終わりごろから奈良時代にかけて墓地がつくられました。これらのお墓は岩はだを横にくり抜いてつくられており、奥の部屋に副葬品とともに死者を葬りました。



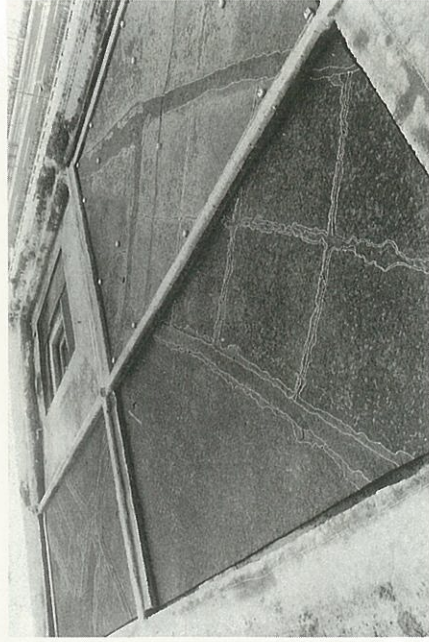
▲ がけにつくられたお墓（茂ヶ崎横穴墓群）

平地の遺跡

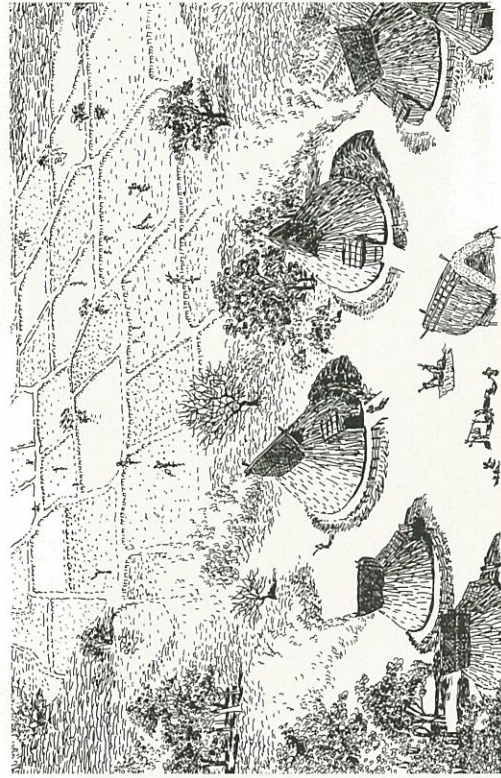
平地は豊かな水と広々とした低い土地があることを特徴としています。農業が始まったからは主に水田として利用され、近くには農村の原型ともいえるムラがつくられました。その後の農業の進歩により、さらにムラは大きくなり大集落もつくられるようになりました。やがて、古代には役所・寺院などがつくられるようになり、しだいに仙台地方の政治・文化の中心となったのです。

こがねいろ いなほ 黄金色の稲穂がみゆる風景

名取川と広瀬川にはさまれた
望京地区あたりは、低く湿った
土地が広がっていました。その
ため、弥生時代になると水田と
して利用されるようになりました。
水田あとからは農作業に使
われた道具がみつかっていま
す。



▲ 弥生時代の水田あと (畝沢遺跡)



▲ 弥生時代のムラのような

平地の大集落

名取川両側の広々とした平地には、古墳時代になると南小泉遺跡や栗遺跡のような大集落がつくられるようになりました。この時代の住居はカマドをもつものが多く、そのまわりからは当時の生活に使われたものがたくさんみつかっています。



▲ 古墳時代の集落あと (栗遺跡)

大きな墓づくり

古墳時代になると大きな勢力をもつ人があらわれ、それらの人を葬るための大きな墓がつくられるようになりました。中でも遠見塚古墳は土を高く盛りあげた巨大なお墓で、長さが110mもあります。



▲ 空からみた遠見塚古墳

国づくりへ

名取川と広瀬川の合流点の西側には、飛鳥時代から奈良時代初めごろ（およそ1300年前）の役所あとである郡山遺跡があります。多賀城が造られる前の国づくりの重要な拠点で、付属する寺院あともみつかっています。



▲ 大きな建物あと (郡山遺跡)

名取川ぞいの自然とくらし

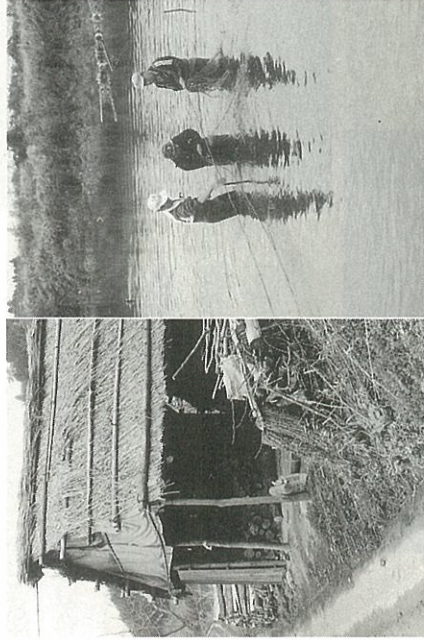
— 民俗展示 —

名取川ぞいの山あい・里・平地は、土地条件・動植物の分布などそれぞれに異なった自然環境をもっています。

昭和30年代の高度経済成長期ごろまでの私たちのくらしは、これらの自然環境とじかにかわり合いながら維持されてきました。このコーナーではかつて名取川ぞいでくりひろげられた、自然と人間生活のかかわりの一端をみていくことにします。

自然環境と生業

名取川上流の山あいでは田畑の規模が小さいため、炭焼き、薪生産、養蚕や木工品の生産など「山」に依存した仕事が多く行なわれていました。一方、下流の平地では広々とした土地を利用した稲作・畑作が中心でしたが、川や堀、沼、水田での魚撈もさかんでした。



▲ 炭焼き小屋 (太白区生田)

▲ 名取川の網漁 (太白区袋原)

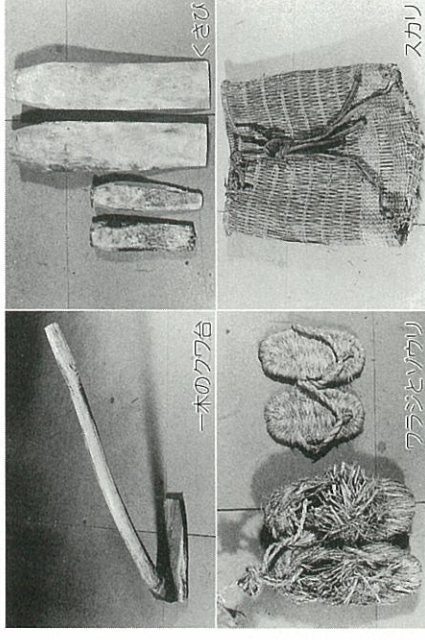
くらしのなかの自然物採取

現在、私たちの生活をとりまく「物」から「自然」を感じとることは、非常にむずかしくなりつつあります。これは、私たちが生活のために自然とかわる機会をほとんど失ってしまったからです。ところが、かつてのくらしでは、生活の多くの場面で自然との直接的な交渉が行なわれていました。食べ物や道具の素材を身近な野山にもとめたり、川や水田で魚をとったことなどがその一例です。

このように採集や魚撈は、原始・古代ばかりではなく、つい最近までみられた生活の営みでした。

植物と道具

山の木々や蔓、また稲藁などの植物は、農具をはじめさまざまな道具の素材としてさかんに利用されました。昔の人たちは、木の硬さや重さ、曲げやすさなど植物に対する豊富な知識をもっていました。そして、それぞれの道具にもっとも合った素材を選んだものでした。



▲ 植物で作った道具

食料としての植物

山や野の植物のなかには食べられるものが数多くあり、かつては四季おりおりのものが食卓にあがったものです。とりわけ、野菜が不足する早春に次々と芽を出す山菜類は貴重なものでした。また、なかには薬として利用されるものもありました。

▲ 食べられる植物 - 仙台市歴史民俗資料館提供 -

魚撈

川や水田、堀などにすむ魚もかつては大切なタンパク源となっていました。とくに、「ドウ」を使つてのドジョウとりは、上流から下流までもっとも広く行なわれた魚でした。また、川幅が広がる下流では定置網漁、地曳網漁など大形の漁がみられたほか、大沼や長沼をはじめとする瀧とする瀧でもさかんに漁が行なわれていました。



▲ 名取川のサケ漁